

# 2011年度 まきばの家事業報告

## 1. 《職員》

- ①常勤職員 18 名、非常勤職員 1 名でスタートしたが、年度途中で結婚による退職等で、約半年間は、常勤職員 16 名、非常勤職員 1 名という厳しい人員配置で切り抜けた。
- ②虐待により重篤な症状をあらわす子どもたちを抱えながらも、チームとして日々職員が励まし、補い合いながら職務を遂行している姿は、少しずつではあるが、施設としての力量がついてきていると感じさせる。しかし、過酷な環境の下で育ってきた子どもたちを支え、人手不足の厳しい労働条件の中にあっては、常に「バーンアウト」と隣り合わせの職場であることには変わりはない。職員が、この仕事を通して人間性を磨き、真に人間的な繋がりを大事にする職場を目指してきた。

## 2. 《経営面》

- ①後援会からの物心両面にわたる力強い支援は、「措置費施設」と言われながらも、十分な手当てがない現状においては、経営に不可欠な要素となっている。また、食料品、日用品、衣類、絵本、玩具等々地域からの物資の寄付もいただいております、経営面で大いに助かっている。
- ②職員は、「エコな生活」を子どもたちにも呼びかけ、無駄を排し、節約に心掛けてきた。

## 3. 《連携》

- ①入所児童のうちで、5 割弱の子どもたちがこひつじ診療所に通院し、治療を受けている。(2012 年 3 月現在)。子どもにとっても職員にとっても欠かせない存在である。
- ②「デンマーク牧場を緑化する会」をはじめ、地域公民館組織ひとつである「笠原地域福祉推進委員会」、女性中心のボランティア団体「笠の会」、退職女性教師の会等々、これらのグループにより、草刈り、まきばの家中庭の芝生管理、花壇の植え替え、ガラス拭き等、様々な奉仕活動が行なわれた。これらの機会に職員や子どもたちも共に参加し、交流することで、地域との協力関係や連携作りの一助となっている。
- ③「よく食べ、よく働き、よく出す」をテーマにし、小学 5 年生以上の子どもたち 11 名が参加した「夏合宿」(5 泊 6 日)を通して、たっぷりと牧場の生活を体験した。まきばの家の食卓に日々提供されている乳製品の生産現場を身をもって知ること、また、米が取れる田んぼの草取りをし、育った野菜を収穫し、さらにはそれらを自分たちで料理し、一緒においしく食べる合宿生活は、「仲間作り」に繋がり、生きた「食育」になっている。また、こどもの家の寮生たちとの交流は、施設出身、中卒という「厳しい状況」を垣間見ることになり、現在の自らの生活を振り返る良い機会になっている。
- ④「新小規模棟増築計画」は、予定通り建築工事は 8 月に着工し、11 月末に完了した。資金調達及び支払いも予定通り年度内に終了した。子どもたちの入居は新年度から始まる。

## 4. 《その他》

- ①日常生活においては、「環境を守り、命を大切に生活」を堅持している。例えば、粉せっけん、固形せっけん、せっけんシャンプー・リンスの使用、アクリルたわしの使用等々である。食品は、なるべく化学調味料や添加物の少ないものを選んで購入している。また、それらの必要性、意味を子どもたちに伝えていくためにも、毎月の職員会議において職員が学習している。
- ②今年度も多くの見学者を迎えた。民生児童委員、主任児童委員、他府県の児童養護施設職員の方々である。特に施設関係者からは、牧場を持つ施設として「羨望の眼差し」さえ感じることも多々ある。私たちにとって、今後も大事にしたい環境であることを外部の関係者との交流を通して、改めて強く感じさせられている。